

第57回 東海伝統工芸展 受賞者紹介

日本工芸会賞 藍色志野壺
酒井 博司（陶芸） 岐阜県

私は「志野」の伝統を大切にしながら、私の感性を通して技法、素材と向き合い私にしかできない現代的な「志野」の表現を追求してきました。今回の作品は、昨年まで取り組んできた轆轤成形で造形した均整の取れた美しいアウトラインを持った器形に直線でシンメトリーな削りをした「静」の美しさの表現から、新たに美しいアウトラインを崩さないようなアンシンメトリーな曲線の削りで動きを感じさせる「動」の美しさの表現に挑戦した作品です。この度の受賞は作品そのものの評価に加え、新たに挑戦する姿勢を評価していただいたものと嬉しく思っています。新たな挑戦での今回の受賞はとても励みになります。より一層の精進、挑戦をしてまいりたいと思います。

東海伝統工芸展賞 有線七宝香炉「レッドアイリス」
池田 貴普（諸工芸） 愛知県

本作は、赤いアヤメをモチーフとした香炉です。銅胎に釉薬を焼き付けてから本体の中央部に銀箔を帯状に貼り、その上から無色透明の釉薬で覆って焼成し、それから中央部以外の全面に銀箔を貼り、再度無色透明の釉薬で覆い焼成することで深みを出しています。次に本体中央に小さく切った金箔を貼り、銀線を植線して焼き付け、茶金石を混ぜた赤透と半透明の白、無色透明の釉薬を用いて施釉して焼成を四回繰り返した後に研磨しています。蓋には六つの穴を模様と調和するように設け、本体と同じように銀箔を貼り植線し施釉し研磨しています。摘みは蕾をイメージしてシルバークレイで胎を作り釉薬を焼き付けて制作し蓋に取り付けています。今後も七宝の表現を探求しながら制作に精進して参ります。

東海支部長賞「安藤氏賞」 畝織着物「今日がはじまる」
水谷 陽子（染織） 三重県

日の出より早く起きることが多い。太陽が少しずつ顔を出し、だんだん明るくなってくる。闇が完全に消えた時、今日がまた始まるんだ、と実感する。清々しい空気、あたたかい太陽、真新しい今日を作品にしたい、と思い制作しました。流れる雲を表現するため、これまで作品に取り入れてこなかった緋に挑戦しました。幅や間隔など、もう少し工夫できたかもしれない、と心残りもありますが、欲張らず、次への課題にしたいと思います。

愛知県知事賞 変り塗盛器「薄明」
鵜飼 敏伸（漆芸） 愛知県

知多半島の海岸沿いから見た水平線の景色です。丁度陽が沈む時で、海と空に彩られるグラデーションと境に見える陸の対比がとても美しく、それをテーマにして色彩を色面で表現しようと考えて制作しました。また、よく有るモチーフなので図案は悩みました。シナ積層材を加工した木地に麻布を貼って補強し下地を付けて面を整えた後、黒漆を塗り重ね、加飾に入ります。まず上塗り面に白漆を塗り直ぐにグラニュー糖を蒔きます。漆が固まった後、糖を流すと無数の粒跡が現れるのでそこに色漆を埋めます。赤紫、茶、オレンジ、黄、青、黒紫をそれぞれ明暗で60色ほど作り、色に変化をつけながら色埋めを重ねました。その後、色味に気を付けて研ぎ出し、艶付け作業を施し仕上げとしました。

岐阜県知事賞 木芯桐塑紙箔貼「響け！」

豊田 亜也女（人形） 愛知県

近年、音楽をテーマにしていますが、今回は指揮者を取り上げました。どのようにしたら指揮者の情熱やオーケストラの壮大な響きが伝わるのか、静止している姿の中へ動きの一瞬をとらえて作り込めるか、ポーズを決めるまでが一番大変でした。仕上げの工夫は、シャツとベストの質感の違いを銀箔を裏箔にして使うことで表し、燕尾服の黒色の深みを出すために下貼りの赤の美濃和紙に、紫と黒の典具貼紙を重ね貼りしました。ズボンの側章には、黒箔を裏箔にして貼っています。仕上がってみると、形に気になる点もあり、より自然な動きの作品を制作出来るよう、これからも精進いたします。

名古屋市長賞 木芯桐塑紙貼「早春賦」

山川 玲子（人形） 愛知県

「暦のうえでは春なのに、まだまだ寒く時折雪が降る日も続いて色のない景色が広がっているけれど、池の氷が少しずつ溶け始め草は芽吹いて、春は着実に近くまできている」という春を待ち望む気持ちを歌った合唱曲を一人の女性の人生になぞらえて、大変なことはあっても希望を持ち迷いながらも胸を張って前に進もうというイメージで人形を作りました。制作過程において、柿渋で染めた和紙を使い皮のジャケット感が出せるようにしました。ワンピースは和紙の上のみずごろもを貼りまだ寒さが残る凜とした空気感を、そしてフレアスカートで寒さが少しゆるんだ春の柔らかさを表現しました。厳しい冬の後に来る春の気配を少し感じていただければと思います。

中日賞 黄瀬戸条紋大鉢「Ripples」

加藤 作助（陶芸） 愛知県

ここ数年、日本工芸会研修会へ参加する機会に恵まれ、様々な地域の方と交友を広げる事ができました。そこでの経験が私の制作に少なからず変化をもたらしたと感じております。今回は素材の持つ個性を素直に生かすよう制作しました。ロクロによる成型では土を技術で造形する一方、回転の中にリズムや同心円状に広がる波紋を感じ取ることができます。その「動」を受け止める形と黄瀬戸釉のもつ柔らかく「静」な雰囲気とを組合せることで Ripples を生み出すべく制作をしました。まだまだ道半ばではありますが、今回評価頂いた事で自信となりました。今後より豊かな表現へと続けていきたいと考えています。私事となりますが「作助」襲名の節目に久しぶりに賞を頂きました。これを励みに今後も制作に真摯に向き合い、歩みを進めて参りたいと思います。

NHK名古屋放送局長賞 鉄絵銅彩鉢「山法師」

佐藤 文子（陶芸） 愛知県

初夏の爽やかな風を受けて揺れる山法師は、まるで白雲がたなびくように、緑葉の間に白い総苞片が静かに浮かび上がります。その爽やかな空気感を大切にしながら、器全体に山法師が咲き広がるような情景を表現しました。近年は、形体と装飾表現の一体感をテーマとして、陶管を中心に制作を進めてきましたが今回は、轆轤成形によるシンプルな鉢を用い、形体と装飾模様が一体となった作品を目指して制作しました。今後も、陶素材の質感・筆致の表情・灰釉を重ねることで創出される色彩感を大切にしながら、器全体が調和していく表現を探求していきたいと考えています

東海伝統奨励賞 飛鈿象嵌白磁大皿「青碧」
酒井 紫羊（陶芸）岐阜県

16年前に愛知芸大の研修旅行で九州へ行った際、数ある焼き物の産地をめぐりつつも、小鹿田焼の飛鈿の力強さと美しさに、最も深い感銘を受けました。念願かないまして、一昨年暮れに文化庁の研修に参加し、小鹿田の兄弟窯である小石原焼の福島善三先生より飛鈿の技法を指導していただきました。大学では瀬戸染付を学んでいたことから、染付の呉須に釉と土を混ぜたものを、飛鈿の彫の部分に象嵌し、呉須の青と磁器土の白とのコントラストを活かした作品を目指しました。私自身が追い求めている釉裏紅や飛鈿は、焼き物ならではの表現であると考えています。焼き物にしかできない技法の面白さと美しさを、今後も追及していきたいと思っております。

東海伝統奨励賞 萩とうさぎ
田村 奈那（諸工芸）愛知県

七宝焼で、可愛いウサギをテーマに制作しました。穏やかな夜の情景の中で、母ウサギと四羽の子ウサギが寄り添う姿を描き、私自身も4姉妹の子供を育てており日々の暮らしで感じる静かなやさしさや可愛らしさを感じられる作品を目指しました。月の表現には抜き針という技法を用い、銀の線を使わずあえてはっきりした輪郭をつけない事でやわらかな光を感じられるよう工夫しています。また、背景の萩の花には銀箔を用い、透けるような輝きによって奥行きと季節感を出しました。七宝ならではの透明感のある色彩の中でやさしさとぬくもりと静かな夜の空気を感じていただけたら嬉しく思います。